

平成 23 年度卒業式 式 辞

本日ここに学位記を授与された 1794 名の卒業生の皆さんに、心からお祝いを申し上げます。本日の式典には、先ほど紹介させていただきましたように、各界を代表する方々、そして愛媛大学にゆかりの深い諸先輩に来賓としてご臨席を賜りました。お忙しい中、ご臨席いただいたことに厚くお礼を申し上げます。また、本式典にご出席のご家族、関係の皆様に対して、心よりお慶びを申し上げますとともに、日頃から本学に対するご理解・ご支援に対して、この場を借りて深く感謝申し上げます。

卒業される皆さんは、在学期間中にそれぞれいろんな困難や苦労があったことと思います。それを克服して今日の日を迎えるに至った努力を讃えたいと思います。皆さんが自分の苦難を振り返ってみると、ひとりだけで乗り越えられたのではないことに思い当たるはずです。そこには必ず、家族、友人、先輩や後輩、指導教員などの温かい支援や助言があったはずです。それらの人たちへの感謝の思いを今一度自分の胸に刻み付けて、これからの人生の糧にさせていただきたいと思います。

卒業する皆さんの大部分は就職し、社会に巣立って行くわけですが、大学卒業は人生の一つの大きな節目であり、未知なる新しい社会への船出でもあります。この節目にあたって、いま自分がなすべきことは何かを考え、目標をしっかりとって努力すること、このことをぜひ肝に銘じてください。また、354 名の卒業生は大学院に進学し、勉学活動を続けることとなりますが、大学院に進学することも社会に巣立つのと同じように、大きな節目であります。大学院では学部での勉学と質的に違う深い研究能力と広い領域の知識の修得が求められます。社会に巣立つにせよ大学院に進学するにせよ、学ぶ姿勢を常に堅持し、これまでに培った「知の力」をさらに向上させていただきたいと思います。

今日、人間社会を大きく捉えると、多くの識者が指摘しているように、産業社会から知識基盤社会へ移行しつつあります。知識基盤社会とは、「新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す社会」のことです。このような社会においては、既存の知識を学ぶことよりも、自分で問題を見つけ、その解決に向けて自分で

学ぶこと、すなわち、課題解決型の主体的学習・能動的学習がより重要になります。単に見たり聞いたりしただけではなかなか知識は身につけません。相手に質問したり、相手と議論を戦わせたりすることによってはじめて理解が深まります。そして、さらに誰かに教えることによってその知識が確実なものになります。すなわち、新しい知識を本当に自分のものとするためには、質問したり、議論したり、教えたりする仲間の存在が不可欠です。

仲間の存在は実社会に出たとき特に重要になります。実社会では、チームをつくって仕事をするが多くなります。ここでは、チームのメンバーがいろいろ意見を出し合って、最終的にひとつの合意を形成していく機会が多くなります。これを「チーム学習」と言います。「チーム学習」においては、一人ひとりの能力に限界があっても、多様な知識や個性をもった人たちが相手のことを尊重しながら自由に考えを出し合い、徹底的に議論することによって、当初誰も気づかなかった新しいアイデアに到達することがあります。これがこれからの「知の創造」です。議論することの目的は、みんなで新しい知を創造することにあるのだということをぜひ認識していただきたいと思います。

さて、1年前に発生した東日本大震災は未曾有の被害をもたらしました。また、福島第一原発におけるメルトダウンはこれまで経験したことのない大惨事となり、長期にわたる放射能汚染が懸念されています。今後10年、あるいはそれ以上の期間、大震災からの復興が日本の最重要課題となるのは間違いありません。

西日本においてもそう遠くない将来に東南海、南海地震が起こると予想されています。その発生確率は30年以内で60%とされています。東日本大震災による津波の被害は地域によって大きな差がありました。日頃から防災訓練をしていた地域ではお互いに「声かけ」をしていち早く安全な高台に逃げて人的被害がほとんどありませんでした。一方、別の地域では判断の誤りによって多くの方が津波の犠牲になってしまいました。このことは、住民が正しい防災意識をもつことの大切さを教えてくれました。

愛媛大学には防災情報研究センターという防災に関わるセンターがあります。愛媛県内にはこのセンターがコーディネーター役になって立ち上げたネットワークがあり、県内の隅々まで防災キャラバンを派遣して地域防災力の向上に努めています。

そのメンバーのひとりである森准教授は、興味深い指摘をしています。それ

は災害の危険に対して人々が無意識的に先入観や偏見をもっているということです。この先入観や偏見のことをバイアスと言っています。大災害はめったに起きないものなので、直接経験したり学習したりする機会はほとんどありません。一方、人間は生まれて以来、自分の経験や学習をもとにして態度を決定することが習性になっています。そのため、めったに起きない災害に対しても普段の態度決定の回路が働いて、不適切な判断をしてしまいがちです。これが災害に対するバイアスです。たとえば、異常事態が発生していても大したことがないと思いつむのは「正常化バイアス」です。また、皆が特に騒がないから大したことがないと思いつむのは「多数派同調性バイアス」、現在の延長で将来の出来事が起こると予測するのは「予測バイアス」です。もっといろいろな種類のバイアスがありますが、これらは誰しもが陥る可能性があるバイアスです。森准教授は、学習と訓練によって意識的にセンスを磨く以外にこのような災害特有のバイアスを避ける道はないと指摘しています。

「天災は忘れた頃にやってくる」という古いことわざがあります。これは物理学者の寺田寅彦が述べたと伝えられています。その意味は、「自然災害があるたびにその対策が叫ばれるが、一時しのぎに終わることが多く、その惨禍を忘れたころにまた災害にあうのが常である」ということです。東日本大震災を契機にいま私たちの防災意識は非常に高くなっています。しかし、このことわざが示すように、時間が経つと記憶も風化して再びバイアスの罠（わな）に陥るかもしれません。災害大国と呼ばれている日本に住んでいる限り、どこに居ても災害に出会う可能性があります。災害から自分の身を守り、家族や地域の人々の命を守るためには、一人ひとりが学習を通して高い防災意識をもち続けることが必要です。いま、私たちみんなの意識改革が迫られているのだと思います。

東日本大震災はきわめて大きな悲劇でした。しかし同時に、その中に未来への光明を見いだすことができました。それは、日本の、そして世界のきわめて多くの人々が、この大震災をわが身のことと感じ、被災地とともに悲しみ、被災した人々のためなら協力を惜しまないという共通の気持ちをもったことです。皆さんの中にも、現地でボランティア活動や支援活動に参加した人がいると思いますが、このようなボランティア活動や支援活動が国境を越えて広がって、人と人のつながりの大切さはこれまでになく強く意識されました。大災害を機に人間が本来もっているすぐれた資質が発揮されたように思います。私はここ

に未来への希望と可能性があるように感じます。

近年、日本は経済的に低迷を続け、国際的な地位も低下して、社会全体が閉塞感に包まれているように見えます。それを打ち破り、新たな社会に作り直すのは間違いなく皆さんのような若い力です。そのためには、皆さん一人ひとりが社会を担う気概をもたなければなりません。その時、拠り所になり、頼りになるのは、仲間の存在や人と人とのつながりです。卒業にあたっていま皆さんは自分の将来に関して熱い思いを抱いていると思います。その熱い思いを忘れることなく、日本および国際社会の発展のために多くの人々と力を合わせて未来を切り開いてもらいたいと思います。

皆さんが、将来それぞれの分野で社会の担い手になり、社会の発展を牽引する役割を果たされることを期待して、門出にあたってのはなむけの言葉といたします。

平成 24 年 3 月 23 日

愛媛大学長 柳澤 康 信